

第4回減災連携研究センターシンポジウムを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、6月18日(木)、減災館1階の減災ホールにおいて、第4回減災連携研究センターシンポジウム「巨大地震を前に建築耐震のあり方を考える」を開催しました。まず、今年度より減災連携研究センターの客員教授に就任した福山 洋国土交通省国土技術政策総合研究所住宅研究部長と梶原浩一国立研究開発法人防災科学技



パネルディスカッションの様子

術研究所兵庫耐震工学研究センター長から、建築耐震に関する調査開発研究をテーマに基調講演がありました。続いて、長江拓也同センター准教授が進行役となり、講演者2名に齊藤大樹豊橋技術科学大学教授を加えた4名によるパネルディスカッションが行われ、日本の建築耐震をめぐる聴衆も交えた活発な議論が行われました。議論では、建築耐震の専門家による説明が非専門家に伝わりにくいこと、専門家間でも安全や安心に関する認識が完全に一致しないことなどが指摘され、議論を積み重ねることに期待の声が集まりました。

また、同センターが取り組む研究プロジェクトについて同センター教員から紹介も行われました。まず、「東海圏減災研究コンソーシアム」における大学間研究連携の成果や「南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト」における分野横断研究の成果が示され、続いて「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」や都市圏防災ワークショップの取り組み、地域の「防災人材発掘」プロジェクトといった地域の行政や住民を巻き込んだ実践的研究の成果が示されました。最後に減災館を通じた防災・減災への啓発活動や災害対策室の取り組みについて紹介がありました。

水田 洋名誉教授への感謝状贈呈式を挙

●附属図書館

附属図書館では、7月15日(水)、館長室において水田 洋名誉教授ご夫妻への感謝状贈呈式を挙りました。これは、平成19年度及び平成21年度に水田名誉教授から譲り受けた近代西洋社会思想史コレクションを補完する、1850年以前に刊行された貴重書を含む研究書約4,200冊並びに、水田名誉教授夫人である水田珠枝名古屋経済大学名誉教授



感謝状贈呈の様子

から、近代西洋女性解放思想史関係資料のうち、同じく1850年以前に刊行された貴重書を170冊余りご恵贈いただき、附属図書館の蔵書整備に多大な貢献をされたことに對する感謝の意を表したものです。

贈呈式終了後には、森附属図書館長、大西事務部長、竹谷情報管理課長のほか、水田文庫の整理を担当した中井えり子研究開発室研究員、小島由香図書情報係長も交えて歓談が行われ、本学の歴史や水田名誉教授の在任中の思い出話が語られました。

歓談後は、昨年完成した新しい貴重書室に移動し、水田文庫の中から代表的な18点の資料について、中井研究員による説明が行われました。寄贈された資料の中には、製本の綴じが異なるバージョンや、刷の違いを比較分析できる資料もあり、水田名誉教授からは、資料を手に入れるまでの経緯が披露されるなど、西洋古典資料の書誌学について様々な意見交換が行われました。

己書セミナーを開催

●大学院工学研究科



己書に取り組む参加者

大学院工学研究科は、7月8日(水)、同研究科国際交流室において、己書セミナーを開催しました。このセミナーは、同研究科国際交流室とコミュニケーションデザイン室が共同で開催し、書家の高橋聡子氏を講師に招きました。己書とは、筆ペンを用いて絵を描くように文字を描く書道の一つで、通常の習字とは異なり、文字を描く際のルールはほとんど無く、書き順すら自由で、誰でも手軽に文字を描くことができます。工学部・工学研究科の日本人学生と留学生から希望者を募り、書道という日本文化を通じて双方の交流を図ることを目的に開催しました。

当日は、高橋氏より己書についての説明があった後、実演とともにセミナーが行われ、留学生も、日本語を学び始めて日が浅いとは思えない程上手に文字を描き、書を通じた自己表現を楽しみました。今後も、国際交流室ではこのようなイベントを通じ、留学生と日本人学生の交流、留学生の日本文化への理解を促進していきます。

第111回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター



講演する関澤教授

減災連携研究センターは6月24日(水)、減災館1階減災ホールにおいて、第111回防災アカデミーを開催しました。今回は、関澤 愛東京理科大学教授による講演「大規模地震による都市火災リスクに備えて」が行われ、69名の参加がありました。

関澤教授からは、関東大震災、阪神・淡路大震災、東日本大震災のいずれも甚大な火災被害を呈した歴史が紹介され、わが国の地震火災リスクの高さが改めて示唆されました。その後、南海トラフ巨大地震や首都直下地震などの将来の大規模地震発生時の同時多発火災に対して、常備消防、消防団、自主防災組織は何かできるか、そして自助・共助・公助に求められている役割とその実態について詳しい説明と問題提起がされました。会場からは講演内容を踏まえ、水利の利用方法や現状の問題点など、活発な質疑応答が行われました。

第36回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



講演する佐々木准教授

附属図書館は、7月7日(火)、中央図書館2階ビブリオサロンにおいて、第36回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、佐々木重洋文学研究科准教授による「民俗映像の記録と活用－奥三河、花祭の継承支援と地域連携の現場から－」と題した講演が行われ、学内外から34名の参加がありました。

講演では、まず、愛知県奥三河地域で行われている花祭が映像で紹介され、続けて、この花祭が継承の危機的状況にあり、無形民俗文化財として花祭を記録する意義について解説がされました。また、この記録事業では花祭の保存会が主体となって今後の継承活動に活用可能な記録を作り、研究者を含めた撮影者と保存会が協働作業で撮影・編集にあたってきたこと、保存会の中で花祭の神事や舞に関して議論し、祭の所作等への理解が深まったことについて紹介がされました。参加者からは、「映像もあり、現状の問題がわかりやすかった」などの感想が寄せられました。